釧路市教育委員会　令和２年第２回１月定例会会議録

１　日時：令和２年１月２９日（木）１３時３０分から１４時３０分まで
２　会場：釧路市教育委員会室
３　出席者
　　岡部義孝教育長
（教育委員）
　　山口隆委員、松尾千穂委員、種村俊仁委員、小出美貴子委員
（事務局）
　　高玉学校教育部長、川畑生涯学習部長、大山教育指導参事、
　　北澤学校教育部次長、江縁学校教育部次長、藤岡総務課長、
　　小野施設計画主幹、松本総括指導主事、外崎青少年育成センター所長、
　　森教育調整主幹、山口給食担当主幹、久保北陽高等学校事務長、
　　工藤生涯学習部次長、澤口生涯学習課長、永井美術館長、
　　佐藤博物館長、松本ふれあい主幹、牧野阿寒生涯学習課長、
　　伏見音別生涯学習課長
４　議事録署名人　　種村委員、小出委員
５　傍聴人数　　０人
６　提出案件

【公開案件】
議案第４号　釧路市富士見球場条例施行規則を廃止する規則

報告事項
（１）２０２０くしろ２０歳のつどいの開催結果について
（２）第９２回日本学生氷上競技選手権大会の開催結果について
（３）学校の現状について

【公開案件】
議案第４号　釧路市富士見球場条例施行規則を廃止する規則

（工藤生涯学習課次長）
「令和元年釧路市議会１２月定例会」において、「釧路市富士見球場条例を廃止する条例」が原案可決されたことから、この廃止条例と関連する、「釧路市富士見球場条例施行規則」を３月３１日付で廃止するものである。

（岡部教育長）
これまでの流れをもう一度説明してほしい。

（工藤生涯学習課次長）
富士見球場については、公設球場として昭和２４年にオープンして以来７０年が経過している。その間、施設が著しく老朽化していき、今まで昭和５０年後半をピークに野球人口、チーム数が減っていることや、合わせて富士見球場の一部危険な状況が見られることから、令和２年３月末をもって富士見球場の条例を廃止する事で、１２月定例会において条例の廃止案を提案したところ、原案可決された。これについて、施行規則についても同じく３月３１日付で廃止したいということで、今回ご提案申し上げた。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

（山口委員）
前回、この件の話題になった時に、跡利用について、場所の立地的に建物を建てるのが難しいと説明があったが、その後何か進捗はあるか。
（工藤生涯学習課次長）
議会の中でも、今後どのような利用を考えているのかという話があった。定例教育委員会でもお話したように、さまざまな規制がかかっており、それをまずクリアしていかなければ木一本手をつけられない。という話から、今後具体的な案があればその用途が可能かどうかを具体的に一件ずつ審査して、どのようにしていくかという事になる。

【公開案件】報告事項
（１）２０２０くしろ２０歳のつどいの開催結果について

（澤口生涯学習課長）
本年の２０歳のつどいは、去る１月１２日（日）、コーチャンフォー釧路文化ホール、阿寒町公民館、音別町文化会館の市内３会場において開催した。教育委員の皆様には、大変お忙しい中、各会場にご出席いただきお礼を申し上げる。

今年の２０歳のつどいの参加者数は、３会場を合わせ、男性５５５人、女性５５１人、合計１，１０６人で、対象者数１，５７０人に対する参加率は７０．４％であった。

特に、阿寒会場において、新成人参加率の低さが課題であるが、阿寒湖温泉地区等在住の外国人対象者の欠席が主な要因となっており、阿寒湖温泉旅館組合等に出席について働きかけのお願いをしているところである。そのような中で、阿寒会場では今年初めて阿寒町の仁成ファームで働くベトナム人女性２名に参加いただき、国際色ある成人式となったところである。式典の内容については、釧路市民憲章の唱和、２０歳のメッセージ朗読を行ったほか、アトラクションとして、釧路会場では鳥取きりん獅子舞と令和元年度釧路市文化賞受賞の鳥取かさ踊りの披露、阿寒・音別会場ではミニライブを行ったところである。参加者への記念品としては、一般社団法人釧根自動車協会ほか７団体からご寄贈いただいたエコバッグに、記念誌や市関係課からのお知らせのほか、昨年からの取組として、ふるさとにＵターンして就職して欲しいとの願いを込め、釧路の企業情報を紹介した冊子を入れて配布したところである。当日は学校教育部職員にも会場整理などのお手伝いをいただき、大きな混乱も生じることなく、予定の次第を滞りなく終了することができた。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

（松尾委員）

音別の会場に出席して、今までも何回か音別、阿寒行ったりしているが、音別は特に大人しかった。人数も少ないが、とても大人しくて、ミニコンサートもノリが悪いし、歌っている人が少し可哀そうで、手拍子も出ないような雰囲気だった。また、私語も無く、まじめに静かに話を聞いてくれるという事はありがたいが、あまりの人数の少なさなので、音別あたりは釧路市と統一できないのか、音別のこころみのバス借りて、家族共々出てこられないのかと思った。あの静かな１時間で成人式の良い思い出になるのか、着飾ってきているし、かわいい女の子もいるが、寂しすぎると思った。これが数人増えたからといって、たいして変わらないのかなと思う。音別や阿寒などは家族が皆一緒に会場に入れるのは、逆にアットホームで良いと思う。直接写真を撮ったりもしているし、こういうことができるのも、小さいところだからなのかと実際思うが、どうなのだろうか。このあたりは、地域の方々との相談もあると思うが、釧路に出てきたら案外楽しいのではないかなと思った。阿寒はベトナムの女性が二人出てくれたという話もあったが、振袖を着せてくれる人がいないので釧路まで来るという話も聞く。例えば、ベトナムの方が民族衣装を持ってきているとは思えない。教育委員会だけではできないかもしれないが、そういう交流のために、何か衣装を貸してあげるとか、着せてあげるとか、そういう事ができたら良いのではないかと思った。

（山口委員）

阿寒の成人式では、二名のベトナム人女性が平服で参加していた。他の女性の方は皆、振袖だったので、受け止め方にもよると思うが、その違いを参加してくれたベトナムの女性がどのように感じたか。阿寒湖の観光協会の方に外国人の参加もお願いして、積極的にこれか

らもすすめて行くのだとしたら、今松尾委員が言った事も、検討の一つに入れておくべきではないかという気がしている。阿寒会場の雰囲気も２５名だったが、非常に大人しくて、ライブのところで、もう少し盛り上がってくれ、と気を揉むほど静かな中で、演奏者一人孤軍奮闘していたという雰囲気だった。この後、インカレの報告があると思うが、年末年始から生涯学習部中心に学校教育部の協力も得ながら、総力を挙げて二つのイベントを見事に成功させたということに対して、心から本当にご苦労様でしたと言いたい。

（種村委員）

逆に釧路会場は人数が多いので、前列の人達はかなりざわついていた。それが少し気になったということと、司会者の方で、女の人がちょっとおちゃらけてピースをしたりしていて、あれはどうなのかなと感じた。釧路市は礼儀という意味ではピリッとしていない感じがした。

（小出委員）

前年音別に行って、静かなアットホームな感じのところから、釧路会場の人数も多いのと、ざわつきが大きいのに少しびっくりした。２年前は前列に来賓の方達が座っていたと思うが、今年は来賓の方がステージに上がっていて、前列には二十歳の参加者が座っていたので、そのあたりがどうしてなのか疑問に思った。

（岡部教育長）

前列に来賓を置いていた昨年度までの形については、実は平成２３年の成人式の時に釧路会場が相当荒れて、前列に座っていた新成人の数人が壇上に上がってという事があったことから、それ以降一定期間、前列に来賓を座っていただくという事をやっていた。その状況から比べると私が見た中では釧路会場も静かな方である。その当時は物凄い喧噪の中での成人式だったので、教育長になって戻ってきてその光景を見たので、そもそも来賓というのは壇上に上がっているべきなのだろう、ということで私の指示で元に戻したという事である。

（澤口生涯学習課長）

「二十歳のつどい」そのものを法の改正で成人が１８歳になるのが２０２２年になるので、それに合わせて令和２年中に見直そうと思っている。今頂いたご意見も参考にしながら、これから２０歳になる、１８歳からの人達のご意見を聞きつつ、今年中に方向性を示して来年に向けて決めていきたいと考えているところである。

【公開案件】報告事項

（２）第９２回日本学生氷上競技選手権大会の開催結果について

（工藤生涯学習課次長）

昨年１２月２５日から２９日、及び本年の１月４日から７日までの９日間にわたり開催された、第９２回日本学生氷上競技選手権大会の結果について報告する。

スピードスケートでは、１５校、１８５人、フィギュアスケートでは、７２校、１９５人、アイスホッケーでは、４２校、９３６人、参加選手の総数は１，３１６人となり、各部門において連日熱戦が繰り広げられた。大会期間中は、各競技に地元ゆかりの選手が多数出場し

たこともあり、多くの観客が来場され、合計１７，３３５人の観客数となったところである。この度のインカレ開催にあたっては、各競技団体のご協力により円滑に大会運営が行われ、大会役員や参加された選手からも高い評価が寄せられたところである。

本大会に携わっていただいた全ての関係者の皆様、また、各大学同窓会やプログラム広告への協賛により大会を支援していただいた多くの皆様に改めて感謝するとともに、大会を通じて、「氷都くしろ」の知名度がより高まり、地域経済の活性化に寄与したものと考えている。

今後ともスポーツの振興並びにスポーツを通じた地域活性化が図られるよう、各種大会の誘致に努めてまいりたいと考えている。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

（山口委員）

全種目顔を出させていただき、とても楽しめた。盛り上がっていたし、選手は勿論頑張っていて、レベルも高く、良い大会だったと感じた。大学関係者、地元出身者も多いという事で、その家族や親戚、知り合いを含めて観客も多かったのではないかという気がしている。

（松尾委員）

フィギュアスケートについて、釧路の人間はあまりフィギュアスケートに理解がないというか、興味がないというか、見に来ている方も少なかった。これは教育委員会というよりスポーツ振興財団だと思うが、例えばアイスショーなどを呼んで、頻繁にそういったものをやっていれば、フィギュアスケートの興味が持てるのかなと思った。最近、アイスショーなど子どものものも含めて聞いたことがないと思っているが、そのあたりはどうなのか。

（工藤生涯学習課次長）

実際にそのような話も若干押さえている。ただ、前回と競技観客数の比較をしており、先程言った全体の１７，３３５人の内訳の中で今回何が一番増えたかというと、フィギュアは前回９３５人だった。今回２，４５２人と、ここが一番大きく増えているところであり、なかなか釧路はフィギュアの文化がないということで前回あまり人が入ってなかったが、やはり今年の全日本の準優勝した樋口新葉さん、昨年の世界選手権代表である坂本花織さんが出たということで、結構人も入ったのかなと思う。私もあまりフィギュアは見ないが、見て意外と面白いと感じたので、そのように感じてくれる市民の方が増えればフィギュアの熱も高まっていくのではないかと思った。

（山口委員）

今の２名の方に関して、エントリーはしているが、他の大会の日程の関係で大会当日来てくれるかどうか不確定部分が多く、なかなかその選手の名前を使ってＰＲはしにくいと聞いた。直前になって来るという事が確定した段階で市の広報車などを使って、こういう選手が来ます、是非足を運んでください、というＰＲはできるのかなと思った。

（岡部教育長）

広報手段は広報車に限らずあると思う。ただトップクラスの選手が来るという事を、お話

できていれば、もう少し入ったかなという気持ちはある。また、氷都としては、こういったインカレを再度開催するという事もありうることかと思うので、今頂いたご提言、ご指摘については、この後に反映させていければと思う。

【公開案件】報告事項
（３）学校の現状について

（大山教育指導参事）
初めに、初任者の住居侵入事件があったので、校長会議ではそのことに触れて校長先生方には「再度、服務規律の保持についてのお願い」と「今後初任者が増える傾向にあるので初任段階の先生方への社会人としての丁寧な指導のお願い」をした。
次に、釧路市標準学力検査の結果が出たので、それをベースにして各学校で「学力改善プラン」を作成している。作成する時の参考資料という事で、学校経営訪問の中で各校長先生から「この取組が成果が上がった」とＰＲしていただいた取組をまとめて示した。まだやっていない学校については、これを参考に学力向上プランを作成していただきたいという話をしている。市教委の方では、このあと釧路市としての分析を進めて、２月下旬には各学校の管理職を呼んで、担当指導主事と１校ずつ協議を行う。従来はすべて学校任せだったが、各学校が自校の実態に合わせた学力向上プランを作成できるように、日常的な取組として市教委と関わりを持っていきたいと考えている。特に、学年によってばらつきが大きい学校や経年変化で伸びが見られない学校には具体的な分析と改善策を示していきたいと思っている。最終的に加配等の人事が決まった来年度４月早々にこの学力向上プランが各学校から公表されることになる。
次に「中学校の特別支援学級の教育課程について」各学校にお願いを再度している。実は間違った認識をしている学校があり、校長先生は正しい事を知っているが担当の教員が間違った説明を保護者にしているケースがあった。特に、高校進学の課題、評価の課題、教科履修の課題について、もう一度、各校長先生の方から特別支援担当者の方に指導してくれという事で、この時期は来年度の教育課程を編成する時期なので再度お願いをした。来年度、４月に入り次第早々に校長が入れ替わるのでこの話をしていきたいと思う。この問題は３年くらい続けて同じことが言われ続けられていたので、早急に解決したい。
最後に「センター講座の見直しについて」報告する。
今３３本の研修講座やっているが、全て見直すという事で、見直しの視点として、中学校の講座を充実させる、二つ目に道教委の研修講座との重複を避ける、避けるというか道教委と一緒にやれる講座があれば一緒にやるという形をとる。三つ目としては働き方改革に合わせて実施時期については今長期休業中に休みをとる形になっているのでそれをずらす、という事の３点で、実施回数、時期、内容について見直す。各学校には、研修講座は釧路の講座だけではないので道立教育研究所の研修講座、道教委の研修事業も含めて先生方に計画的に参加するように計画を立てさせてくださいという話をしている。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

（山口委員）

１点目の各学校の学力向上プランの作成の参考について取組例が示されているが、まさに学校経営のＰＤＣＡのサイクルを自主的に機能させるために、チェックが標準学力調査の結果がであり、アクション、プランがその結果を踏まえてどういう戦力を立てるか。ここのところで、より今まで学校任せになっていたのを、もう少し効果的な取組をやっている学校の先行事例も参考にしながら、より有効な手立てを各学校にとってもらうためにという事で、授業作り、環境づくり、習慣作り等々、具体的に示されているので非常に分かりやすく、各学校の方もこの適切な情報提供を本当に真摯に受け止めて、実行性のあるプラン、アクションを起こしていただければ、と大いに期待したいと思う。

（松尾委員）

授業作りや環境作りなど、項目がたくさんあり、本当に大事だなと思ったものも沢山あるが、校長先生たちが見て、これは本当に素晴らしいものだと思って、自分たちもやってみようということにならなければだめなのかなと思った。小学校だったら環境作りの部分で、根底となる基礎学力の習得は学校ごとでやっていることだと思う。

先日学習支援で児童館に行き、子どもの勉強を見た時に、３年生なのに九九が頭にちゃんと入っておらず、これは、完全に２年生の内に九九を教えきらないで３年生にきてしまったんだというふうに思ったので、放課後を使ったり、朝学習などでも、出来ない子には徹底的に出来るまでやらせるという学校の方針が必要なのかと思った。それが学校全体の学力向上にもなるのではないかと思う。良いものは良いと皆さん評価されると思うが、それをただ見るだけではなくて、自分のところはこうやっているから良い、ではなく、学力向上のためには他のところの良いものを盗んで、先生方全員の力で自分たちの学校の生徒の学力を上げるということが必要だと思った。

（小出委員）

これだけ沢山のいろいろな工夫をしている学校が子どもたちの教育にあたっているのが目に見えて、凄いなと素直に思った。「全教職員で」と書かれているところがいくつもあり、それを見た時に、その学年、教員だけではなく、学校全部で子どもたちに向き合っているというのが、この中から見えたような気がして、嬉しいというか素敵だと思った。父兄やいろいろな学校のママ友の繋がりで、あそこの学校はこういう取組やっているらしいよ、というような話が出る。うちの学校でもやってほしい、なんでうちの学校こういうのやってくれないの、という意見が結構あるので、このように目に見える形で１個ずつ細かく書いて、それが学校に浸透して、いろいろな学校に広まっていけば良いと思った。私の子どもが小学校の時にも、ノーゲームデーというのを北中学校と中央小学校で連携してやっており、その際に「ゲームだけをやめるのではなく、図書室を開放していつもより本を多く借りられるようにして、たくさん本を読みましょう。空いた時間で本を読みましょう。という取組を同時に進めたり

しており、いろいろな学校に広がりつつあるという事だったので、図書室の活用を含めて全市に広まっていけば良いと思った。

（種村委員）

「釧路市標準学力テスト」の結果について、先日同じ学年の生徒の１年ごとの成績状況をグラフにしたもの見させていただいたが、同じような結果で小学校の場合は平均点以上だが、中学校の場合は平均点が途端に下がる状況となっている。おそらく小学校の時は、親も非常に期待しているし、子どもも純粋に勉強している。釧路の小学校の先生の授業も何回も見たことがあるが、非常に生徒とうまいキャッチボールをしていると感じたし、教え方も上手い。では、中学校に入ってなぜ下がっていくかというと、先生の教え方が良くないのもあるかもしれないが、昨日、高校の倍率が発表されて、特に釧路あたりは倍率がない状況で、ほとんどの生徒が高校に入れてしまう。となると１年生の段階で、たとえ３年後高校入試があっても、だいたい自分は受かるだろう。つまり勉強に対するモチベーションが、おそらく中学校に入ってなくなるのではないかという気がする。やはり勉強というのは中学校になると多少難しくなるので、その難しさを乗り越えるためにモチベーションを保つことはとても大事な要素だと思う。それがなかなか起こらないとなれば、構造上に問題がある。例えば高校入試がもう少し倍率が高くなるような高校の配置など、いろいろなやり方があると思う。小学校と中学校で物の考え方が変わるということに対して、もっと中学校でやる気を起こすような環境作りを、教育委員会で担当するのも難しいとは思うが、ある程度構造的に変えていかなければならない気がする。

（岡部教育長）

高校のありようについては道教委の範疇なので、道立高校、市立高校も含めて、なかなか市の教育委員会としては、関わっていけないところはある。

（山口委員）

よく「中１ギャップ」という言葉がいろいろな使われ方をするが、小学校５、６年生で担任の先生が評価するためにテストをやる。ほとんどの子どもは８０点以上とっているのが小学校の一般的なパターンだと思う。なので、通知票にも「よくできる」という評価ポイントがつき、保護者もそれを見て「うちの子、頑張っているな」と思う。しかし、中学校１年生に入って最初のテストで、小学校でとった点数よりもガクンと落ち込む子どもが結構多い。それをどのように子どもが受け止めるか。そして、３年後の見通しをどう持つかというあたりで、かなりギャップが生まれる。

昨年あたりから、小中合同の研修をやっていると思うが、うまく小中を繋ぐという事で、とてもいい取組だと思っている。そういった中で、中学校に行った時の点数こうなるよ、そのためにはこういう準備が必要だよ。という事を小学校の方からも必要だし、中学校から小学校への情報提供も必要だし、うまくギャップが生まれないような連続性を工夫したら、もう少し中学校１年生の子どもたちのモチベーションが違うのではないかと思う。ここでつまづいたけれど、軌道修正しなければならない、という積極的な受け止め方をもしかしたら出来るかもしれないので、そのあたりをどうしたら良いのか、検討してもらいたい。

（大山教育指導参事）
　小中連携の部分だと、学校にもよるが、中学校１年生に入学してすぐに「お迎えテスト」があり、お迎えテストの問題を６年生に冬休みの長期学習支援の時にやらせる。やらせて中学校の問題はどれだけ難しいかと認識させ、宿題を春休みに持たせて、子どもは中学校に宿題を提出する。という取組をやっている学校もある。全くそういうのをやっていない学校もある。つまり、そういう事を全市的にやれるようにするための仕組み作りをこれからしていかなければならないと思う。今回、取組例を全部出したのは、やはりやっている学校は安定して高い学力を示している。やってない学校は不安定で学力も低くなる学年が多い、いわゆる子どもの質に頼っている学校である。小学校と中学校の数の違いはそのまま表れていることになる。なので、今後指導主事が絡みながら全ての学校で、例えば「ノーゲームデイ」をやってください、全ての学校でやってくださいと言うよりは、１校１校にやってくださいと言った方が確実なので、そういう動きもこれからしなければならないが、全体で一番効果的なのは、とにかく統一してやれる方向で少しずつ考えていきたいと思う。
（岡部教育長）
　取組例を最初見た時に、全教職員にこんなことをやっているという事が事例として上がっているのを見て、全教職員にやらせるという事は、校長のリーダーシップがある学校でしかないと思ったので、やはり校長の力量というか指導力というか、こういったものが学校運営、学力に表れるんだと改めて感じたところである。そういった意味で最後の教育研究センターの研修も中学校に特化した研修をすすめており、これをさらに強めていきたいと思っている。
（山口委員）
　特別支援教育についての共通理解について、正しい理解が一部の先生方も誤解しているし、受け止める保護者の方も間違った情報、判断で子どもたちに間違った方法を強いてしまう。これは最終的に子どもにとって一番悲劇なのではないかという気がする。特別支援学級に在籍する子、普通学級にいても、困り感のある部分に適切にフォローしてあげて、なんとか対応できる子。千差万別だと思うが、我が子の困り感をなるべく早い段階で保護者が正しく理解して、適切な手立てを講じていくという事が一番必要なことだと思う。先生方の責任だけではなく、正しく理解しない保護者に対する学校側からのアプローチの難しさはずっと特別支援教育に関わっては大きな課題として今までもあったと思う。できれば小学校に上がる前の段階から保護者に対して適切な情報を提供し、そして同じ認識を持ってその子どもに対応していくということが、子どもにとって最終的には幸せな事ではないかと思うので、他の部署とも連携しながら講じていただきたいと思う。
　３学期各学校への指導で是非やってほしいと思うことがあり、今中国武漢市で起こっている新型コロナウイルスについて、先程、星が浦のホーマックへ行った時に赤いベレーで勤めている方が消毒液を買いに来ていて、知り合いだったのでいろいろ話していたら、保健所の方から、阿寒湖畔も含めて赤いベレーもインバウンドでいろいろな人が入ってくるので、マスクも必ずつけることと、手洗いの徹底をうるさく言われていると聞いた。日本人が国内で感染したという事例も報告されているし、釧路はインバウンドも観光客もどんどん入ってく

る地域でもある。やはり釧路市民として、幸い子どもたちの感染は中国本土でもないと言われているが、大人の意識の持ち方、そして学校で子どもたちへの指導、保護者への指導の徹底も今後重要な事なので、よろしくお願いしたい。

（岡部教育長）

特別支援について、毎年のように特別支援に関わっての保護者、関係者の皆さんの会に呼ばれていろいろ意見をもらう事が多く、そこで聞く話というのは、こっちの保護者はこう言うし、こっちの保護者はこう言うし、それが別である。つまり、学校ごとに特別支援の担当の先生が言っていることが違うということを、彼らは毎回言う。保護者も理解という話があったが、私が特別支援に関してそういった方々から聞いている中から受け止める印象というのは、特別支援に関わっている先生方のスキルというか、そのあたりが学校ごとに差があるのではないかという事を具体的に言われるし、今の山口先生のご意見もあって、学校現場に対する参事の見方はどうか。

（大山教育指導参事）

平成２９年３月に進路指導について資料が出ており、この時現場の校長だったので、一度校長会で話をして、教頭研修会でも説明して、これは問題であると言った。その後、退職して戻ってきても、出てきている事が同じだった。市教委に問い合わせもくるし、校長会の中で小学校の校長先生方が中学校間違っているよね、という話にもなった。特別支援学級から普通公立高校には進学できません、というような話が中学校であったようだが、そんなことはない。そんなことがあたりまえのように語られていて、小学校高学年の子どもは中学校に行くときに無理に通常学級に在籍変更する。その理由が高校に進みたいから、行けないと言われたから、ということもあり、同じことを何年間も担当者が理解していないという事に課題がある。それで今回校長会で話をして、また４月にも話をして、必要であれば資料も出さなければならないという状況である。

（岡部教育長）

ある学校では特支の学級については評価が１で、ある学校では評価しないというふうになっているだとか、それは受け止める保護者の受け止め方の甘さなり、間違いなり、そういうのもあるのかもしれないが、学校個々に特別支援の担当の先生の認識というか指導力というか、そこにばらつきもあるような気がする。

（大山教育指導参事）

中央小学校の時の卒業生が行った中学校の特別支援の教育課程が、英語や社会や理科はしません。うちはしません、と言われて、何やるんですか？と言ったら、ジャージや制服の着替えをきちっと出来るように毎日練習しますと言われて、ひっくり返りそうになった。本当に課題だと思っている。

（岡部教育長）

そのあたりはトータルで細かく指導体制を作っていかないと、変わらないと思う。

（山口委員）

昔は拠点校方式で特殊学級、今は全ての校区の学校に特別支援教室を設置して、そこに通

うような形になっている。やはり、障がいを持っている子どもにも、障がいの程度によって、服をちゃんとまともに着られないので生活訓練から始めなければならない、自分のことは自分でやれるレベルまで到達させる事が一つの目標だというレベルの子もいる。しかし、少しフォローすれば、他の子と同じように高校受験して３年間皆と一緒に高校生活を送れるという子もいる。同じ障がいを持った子どもでも程度の差があるので、それを一緒くたにしてしまう所にかなり無理があるのではないかという気がする。資料に書いているような子も中にはいるのは事実である。しかし、全てこれを一色で見られてしまうのは、それは悲劇だという気もする。そのあたりを、一人ひとりの子に合わせた適切な教育課程を組んで教育を提供してあげる事が必要なので、そのためにはどういうシステムが必要なのかということも別次元で考えていかなければならないと思う。